

# 特別支援教育における学校コンサルテーションの在り方に関する研究

## ～ これから望まれる学校支援 ～

高知県立日高養護学校 教諭 松田 真一  
高知県教育センター 指導主事 芝野 稔

特別支援学校は、特別支援教育のセンター的機能の一つとして、小・中学校等で特別な支援を必要とする子どもたちへの手立てについて教育相談を行っているが、近年、相談件数の増加に伴い、限られた回数でより効果的な支援を行うことが求められている。しかし、従来の教育相談は、担任に対しての直接的な支援に終始することが多く、学校組織に対するアプローチが不十分で、支援方法の蓄積と活用ができていない現状が見られる。そこで、学校組織に働きかけるコンサルテーションを行い、学校主体の機能的な校内支援体制の整備・充実を図ることが重要と考える。本研究では、効果的な学校支援に必要な各種支援ツールの開発と、それらを活用した学校コンサルテーションの在り方について考察を行った。

キーワード：特別支援教育、学校コンサルテーション、校内支援体制、校内委員会、ケース検討会

### 1 はじめに

平成 17 年 12 月、中央教育審議会の「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」では、特別支援学校に期待するセンター的機能として、①小・中学校等の教員への支援機能、②特別支援教育等に関する相談・情報提供機能、③障害のある幼児児童生徒への指導・支援機能、④福祉、医療、労働などの関係機関等との連絡・調整機能、⑤小・中学校等の教員に対する研修協力機能、⑥障害のある幼児児童生徒への施設設備等の提供機能の 6 点の機能が示された。

平成 18 年 6 月には、学校教育法等の一部を改正する法律で、「特別支援学校においては、在籍児童等の教育を行うほか、小・中学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について助言援助に努める」旨が規定された。そして、平成 19 年 4 月 1 日付けの文部科学省初等中等教育局長の「特別支援教育の推進について（通知）」では、「特別支援学校においては、これまで蓄積してきた専門的な知識や技能を活かし、地域における特別支援教育のセンターとしての機能の充実を図ること。特に、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び中等教育学校の要請に応じて、発達障害を含む障害のある幼児児童生徒のための個別の指導計画の作成や個別の教育支援計画の策定などへの援助を含め、その支援に努めること」が示された。また、小学校学習指導要領解説総則編（平成 20 年 8 月）では、「障害のある児童の指導に当たっては、特別支援学校の助言や援助を活用すること」が示された。

平成 19 年度から、特別支援教育が始まり、小・中学校等では、発達障害を含む障害のある子どもたちへの支援の在り方について、専門的な助言を求めている現状が見られる。そのため、小・中学校等からの特別支援学校に対しての相談件数が年々増加し、相談内容も多様化してきている。このような現状の中、限られた回数で、より効果的な支援を行うことが求められている。

### 2 研究目的

特別支援学校が行ってきた教育相談における、小・中学校への支援の実践を振り返ってみると、①「事前の情報が限られており、学校全体の状況や子どもを取り巻く学級の様子などが分かりにくく、スムーズな支援になりづらい」、②「教育相談後の取組の現状が把握しづらい状況があり、連続的な支援の積み重ねが難しい」、③「一連の支援が終了した後の、教育相談全体の評価があいまいで、教育相談担当者の十分な反省ができない」、④「教育相談で行った支援方法などの情報を学校全体として共有し、組織として支援できる体制につなぐことができていない」などの問題が挙げられる。

これは、これまでの特別支援学校のセンター的機能としての教育相談が、担任に対しての直接的な支援に終始することが多く、学校組織に対するアプローチが十分でなかったため、小・中学校での校内支援体制の整備・充実につなげることができていなかったからではないかと考える。

以上のことから、これから望まれるより効果的な学校支援について研究を進めることとした。

そこで、校内委員会の実践を基にした効果的な支援方法の在り方を検討し、機能的な校内支援体制の整備・充実のための学校コンサルテーションの在り方を探ることとし、以下の研究仮説を設定した。

**【研究仮説】**

学校組織に働きかける学校コンサルテーションを行い、校内委員会を効果的に機能させることができれば、職員間での課題解決能力が高まり、学校主体の機能的な校内支援体制の整備・充実を図ることができる。

**3 学校コンサルテーションについて**

独立行政法人国立特殊教育総合研究所の「学校コンサルテーションを進めるためのガイドブックーコンサルタント必携ー」(2007)では、コンサルテーションとは、「異なる専門性をもつ複数の者が、援助対象である問題状況について検討し、よりよい援助のあり方について話し合うプロセスである」とし、学校コンサルテーションとは、「学校の間で行われるコンサルテーション」と定義づけている。

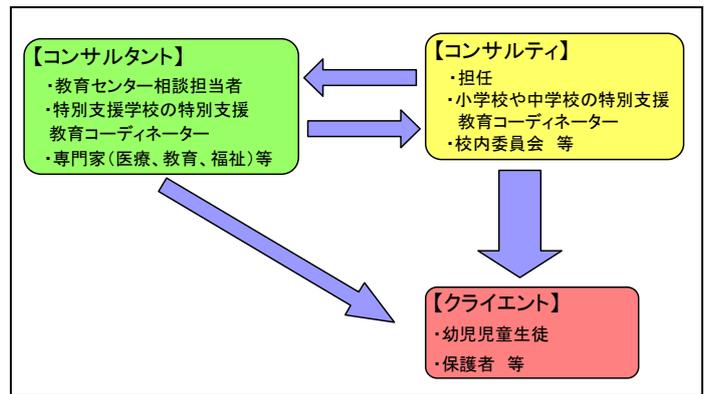


図1 学校コンサルテーションの関係図の例

学校コンサルテーションにおけるコンサルタント、コンサルティ、クライアントの関係性は図1のようになり、コンサルタントとは、地域支援を実践している教員等のこと、コンサルティとは、コンサルタントの支援を受ける人のこと、クライアントとはコンサルティに直接支援を求めている者とされる。コンサルタントとコンサルティは、お互いに連携し相談し合う関係性にあり、コンサルティがクライアントに直接、支援・指導を行う。この時、コンサルタントは、クライアントに対して直接ではなく、間接的に支援・指導を行う関係性にあるとされている。

特別支援学校が行ってきた従来の教育相談は、教育相談担当者と担任やコーディネーターの間でのみ行われることが多く、お互いの立場も教える、教えられるといった一方的な関係性が強い傾向にあった。そこで本研究では、コンサルタント（教育相談担当者等）とコンサルティ（担任等）が、お互いの専門性を尊重し共に考え問題解決を図るといった関係性を重視しながら、学校組織へのアプローチを行う学校コンサルテーションが重要であると考えた。

**4 学校組織に働きかける学校コンサルテーションの実践**

本研究では、学校コンサルテーションを行う対象校を、昨年度に近隣の中学校と統合され、特別支援教育に対しての校内支援体制の整備をこれから図ろうとするA中学校と、すでに校内委員会等の校内支援体制が整っており、更なる充実を図ろうとするB小学校の2校とした。

A中学校に対しては、校内委員会を効果的に機能させるために必要な支援ツールを研究開発し、それらを活用しながら、校内支援体制の整備を図る学校コンサルテーションを行い、その効果について検証したいと考えた。

B小学校に対しては、特別な支援を必要とする子どもの特性に応じた授業づくりができるよう学校コンサルテーションを行い、更なる校内支援体制の充実を図ることができるか検証したいと考えた。

そして、これらの研究を通して、教員間で問題解決する力を高めることができる効果的な支援方法を検討し、機能的な校内支援体制の整備・充実のための学校コンサルテーションの在り方を探ることとした。

(1) A中学校での学校コンサルテーション

A中学校は、教員数13名、生徒数82名、学級数5学級という小規模の中学校である。学校コンサルテーションを行うには、まずコンサルティの主訴を知り、学校のアセスメントを行い、課題を明確にすることが必要であると考えた。

ア 学校コンサルテーションの概要

(ア) コンサルティの主訴

気になる子どものチェックリストの結果や教員の実態報告から、特別な支援を必要とする生徒が増えてきている現状が見られる。そのため、学校の特別支援教育に関する支援体制を整備したいということがあげられた。

(イ) 学校のアセスメント

高知県教育センターが作成している「校内支援体制チェックリスト」と独立行政法人国立特別支援教育総合研究所が研究している特別支援教育に関する「校内の意識及び行動アセスメント」を活用し、学校のアセスメントを行った。なお、特別支援教育に関する「校内の意識及び行動アセスメント」は、まだ研究中のもので、標準化された尺度ではない。

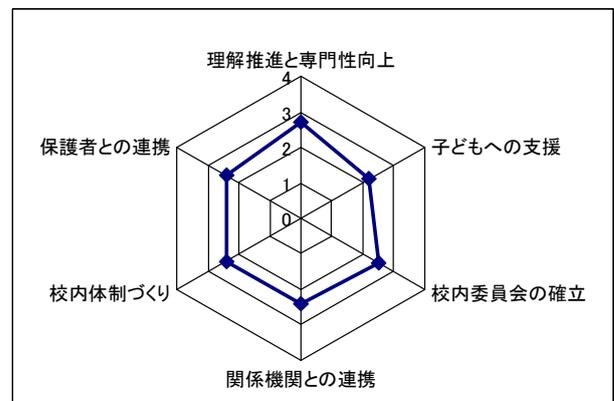


図2 「校内支援体制チェックリスト」の結果

「校内支援体制チェックリスト」(図2)の結果を見ると、全体的にポイントが低く、なかでも子どもへの支援の項目がやや低い。「校内の意識及び行動アセスメント」(図3)を見ると、各教職員のプロットはチームで解決型に入っているが、全体的にバラつきが大きいことが分かる。このことから、特別な支援を必要としている子どもに対しての気づきや支援ニーズに対して教員間で差が見られ、教員間のコミュニケーション力にもばらつきが見られることが分かった。

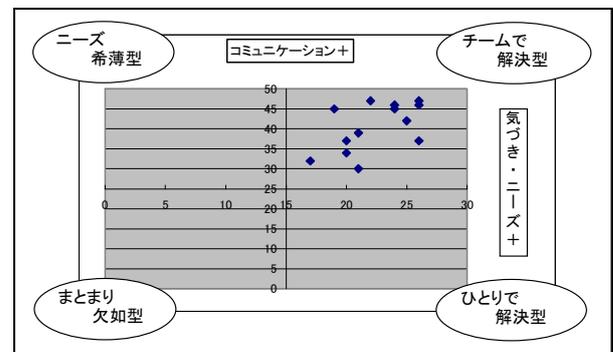


図3 国立特別支援教育総合研究所 特別支援教育に関する「校内の意識及び行動アセスメント」

そこで、A中学校の課題としては、特別支援教育の知識を高めると同時に、既存の組織(校内委員会等)を活用した、教員同士の子どもに関する効果的な情報交換の仕方や支援方法の研修を行い、組織としての情報交換力を高めていくことが必要であると考えた。

そして、特別支援教育の視点を大切に授業改善の取組を通して、校内委員会やケース検討会の効果的な運営を図りながら、校内支援体制の整備を進める学校コンサルテーションを行うこととした。

## イ 取組内容

### (ア) 校内研修会の実施：4月14日（水）

学校コンサルテーションを進めるにあたり、発達障害の子どもたちの基本的な特性について理解を深め、教員が共通認識をもって取り組めるように、疑似体験を取り入れた研修を行った。また、支援体制の整備を図ることを目的に、校内委員会の定期的な開催を提案した。

### (イ) 校内委員会への参加：5月7日（金）

学校の校内支援体制の状況と特別な支援を必要とする生徒の実態を把握するために、校内委員会に参加した。校内委員会のメンバーは、管理職2名、コーディネーター（養護教諭）1名、特別支援学級担任2名、スクールカウンセラー1名、支援員1名の計7名であった。コーディネーターの主導で、資料をもとに特別な支援を必要としている生徒についての報告が行われ、実態について共通認識を図ることはできたが、校内委員会の中で具体的な支援方法を立案するには至らなかった。

そこで、校内委員会の中で、具体的な支援方法を考えるために、まず、対象生徒を1～2名に絞り、会を進める等、会の運営方法についてコンサルテーションを行った。

### (ウ) 校内委員会への参加：6月7日（月）

生徒の実態や学習状況を把握するために、1年の通常学級と2年の特別支援学級の授業参観を行った。校内委員会では、対象生徒の実態と学級での状況を確認した後、今後の支援方法について検討を行った。対象生徒の困難さに対して、課題を整理することはできたが、校内委員会の中で具体的な支援策を立案するまでには至らなかった。

そこで、具体的な支援を考えていく校内委員会等の効率的な進め方についての研修が必要と考え、次回の研修会では、事例検討会を行うこととした。

今回の学校コンサルテーションの中で、生徒の課題・支援方法・各教科等の指導内容・評価・改善点を記入するシートとして、「学びの連携シート」（別添資料1参照）の開発が必要であると感じた。このシートは、外部機関との連携時の資料になるとともに、個別の指導計画の作成時の資料としても有効に使えるものでなければならないと考える。

また、校内委員会等の取組の状況や流れが分かり、学校の支援の記録ともなるシートとして、「特別支援教育記録シート」（別添資料6参照）の開発も必要であることが分かった。このシートに、研修会での内容や今後の課題や取組について簡潔に記録することで、コーディネーターの取組の記録となり、引継ぎ資料としても活用できると考えた。

### (エ) 校内研修会：8月3日（火）

校内研修会は、「ケース検討会で元気をつけよう」と題して、インシデントプロセス法を活用した事例検討会を行った。

研修後の「インシデントプロセス法を活用した研修会の感想」（表1）を見てみると、課題に優先順位をつけ、順位の高いものに絞って検討することで、短時間で多くの手立てを考え出すことを体験することができ、これを今後の会の運営に生かしていくことが大切である等の意見が出されており、今後の効果的な会の運営について有効な研修会になったと考える。

この研修を経て、2学期からは特別支援教育の視点に配慮した授業改善を進めることとし、2年団の教員を中心に構成したケース検討会の中で学校コンサルテーションを進めることとした。

今回の学校コンサルテーションを受けて、特別支援教育の基本的な視点について理解し、教員全体で共通認識を図るための支援ツール「みんなが学びやすい授業チェックシート」（別添資

料2～4参照)の開発が必要であると感じ、作成することとした。作成したシートは、特別支援教育の基本的な視点について、①目標・ねらい、②学習形態・ルール、③授業の構成、④指示の出し方、⑤板書の工夫、⑥ノート指導、⑦教材・教具、⑧学習の評価、⑨学習環境、⑩教師の姿勢、の10項目で30問のチェックリストで構成され、自分の授業や学級運営がチェックできるとともに、研究授業の参観者もチェックを行い、研究協議で活用できるようにした。

また、研究授業において参観者が、特別な支援を必要としている生徒への支援内容や評価方法を共有しやすくするために、授業展開の中の項目に、支援児童生徒への支援内容と評価方法を加えたシート「授業展開の中での個に応じた活動シート」の活用も必要と考えた。

表1 インシデントプロセス法を活用した研修会の感想

	感 想
A	一人の生徒について、こんなに丁寧に話し合いを持ったことは、初めてでした。分かっているつもりでしたが、みんなで出し合い話し合うと、違った視点で改めて考えたり、納得できる場所が多々ありました。インシデントプロセス法も初めてでしたが、情報をもとに実際に取り組んでいくことで結果につなげていくことができるので、一方法としてやっていきたいと思えます。とりあえず行動してみないと分かりません。やってみて成果が出なかったら、また、次新しい方法でやってみることだと思います。
B	小さな出来事から、その生徒のことを考えることにより、具体性が持てました。意見を出し合う中で、どのような意見でも否定的にとらえず、一旦受け入れ、その中でできること、必要なことから始めていくことが大切であると感じました。小さな意見もどんどん出し合える職場を目指したいです。
C	各プロセスを踏み、教員全員で考えることにより、課題や取り組まなければならないことが明らかになりやすく、すぐに指導につなげていけそうに感じました。担任として、一人で悩みなにかやろうとするのではなく、教員みんなの力を借りて、生徒の力を伸ばしていかなければならないと改めて感じました。
D	インシデントプロセス法という、新しいケース検討の演習について学習ができました。話し合いの中では、自分自身どうしても「子どもの実態」ばかりにこだわり、課題や支援方法まで具体的にたどりつけないときもあるため、「課題を絞る」「優先順位をつける」等、課題を明確にしていくことで、結局は問題がより分かりやすく、全体のことになっていくことも、演習の中で理解できました。自分たちが指導する中で、つまずきのある生徒に分かりやすい指導・支援をしていくことで、結局は、表面には出てきていないが助けを必要としているその周りの生徒にも、本当に大切な支援になっていくのではと思っています。
E	一人の生徒について、全員で話し合うことで、多くの情報や支援策を考えることができた。自分だけでは、見えていなかった生徒の様子や背景を知り、今後の関わりに役立つ内容であった。今日の生徒に限らず、一人一人の生徒について、教員同士で話をする必要性を改めて感じた。
F	一人の生徒を焦点化して話し合うことで、他の気になる生徒との共通点や対策方法のヒントにもなった。時間をかけすぎず、時間を切ってやってみると、多くの方法(課題・対策)が出てきたので、有効な方法であったと思う。当たり前に出てきた項目が、日々の忙しさにできていないことが多いことに反省した。一人で抱え込まず、教職員の先生方、また生徒に協力してもらい、一人一人の生徒がこの学校で学べて良かったと思えるよう努力していきたい。

(オ) ケース検討会への参加：10月7日(木)

ケース検討会は、管理職2名、コーディネーター1名、数学科の担任1名、2年団教員3名、支援員1名の計8名で行われた。ケース検討会では、「学びの連携シート」を活用し、前回の研修で考えられた支援方法について確認を行った。検討の場では、ビデオを活用しながら授業の様子を視聴し検証を行った。しかし、前回考えられた支援が授業の中で、十分に具体化されていないことが分かった。

そこで、具体的な手立てにつなげるための支援事例をいくつか提示し、その中から、取り入れられる手立てを絞り込み、実践をしていくこととした。また、ビデオでは分かりづらいため、次回はケース検討会のメンバーで研究授業を行うことを提案した。

(カ) 研究授業の見学、ケース検討会への参加：11月11日(木)

「みんなが学びやすい授業チェックシート」と「授業展開の中での個に応じた活動シート」を活用しながらケース検討会を行い、改善された点と、新たに取り入れると有効である手立てについて検討を行った。

特別支援教育の視点を大切にされた授業改善について検討を行い、次のような手立てを行うことが確認された。

- ・ 時間の構造化を図るため、見通しが持てるように学習の流れを黒板に提示する。
- ・ 授業展開の中で、理解しやすい視覚的な教材・教具を活用する。
- ・ 説明を行う場合は、注目するよう声かけを行い、確認してから始める。
- ・ 問題を解くことに専念しやすくするためのワークシートを作成し活用する。また、その内容は、スモールステップで段階的に解くことができるように工夫する。
- ・ 理解のはやい生徒には、発展的な問題を指示するなどの手立ての工夫をする。
- ・ 生徒が解答できたり、頑張ったりしたことはその場で分かり易く評価する。
- ・ 家庭学習（宿題）については、問題を解く時の手順表やヒントを添えるようにする。（個別指導）

支援ツールとして「みんなが学びやすい授業チェックシート」を活用することで、特別支援教育の視点に対して参観者自身の気づきが見られ、論議が深まり、新たな手立てを考えることができた。

(キ) ケース検討会への参加：12月3日（金）

前回のケース検討会の中で考えられた手立ての成果として、教員が説明をする時、顔が上がり前を見て集中して聞けたり、ワークシートに集中して積極的に取り組めたりする生徒が増えたことが報告された。また、「学びの連携シート」を活用し、今まで取り組んできた手立ての分析から、改善すべき手立てや、新たな手立てについて協同で考え支援の継続を確認することができた。しかし、対象生徒の基礎的な計算の力の定着や、全体の学力向上を図るためには、認知特性を考慮した手立てをどのように授業の中で取り入れるか、また、どのような体制で個別指導を取り入れていくかが今後の課題となった。

来年度の校内委員会の年間活動計画（案）については、コーディネーターと協同で作成した。

(ク) 校内研修会への参加（今年度の取組のまとめと来年度の取組について）：1月12日（水）

授業改善に関する取組と成果について「学びの連携シート」を活用しながら報告が行われた。次に、「みんなが学びやすい授業チェックシート」を参考にして、自分の授業を振り返り、どのような改善が可能かを各個人で考える作業を行った。

年度当初は、校内委員会や研修会の中でも、具体的な手立てを考えることが難しかったが、今回は、短時間で明確な手立てを考えることができた。また、会の進め方も改善され時間内で効率よく、効果的な協議ができた。

自分の授業改善について各個人で考える作業では、その内容を個々で考えることで終わる予定であったが、コーディネーターより、「考えられた内容を発表し、みんなで共有を図りたい。」という提案があり、短時間ではあったが各自が発表を行った。そこでは、新たな生徒への気づきを共有し、これからの支援の必要性を確認することができた。

最後に、コーディネーターと協同で作成した「校内委員会等年間活動計画表」（別添資料7参照）を活用し、来年度の校内委員会の年間活動計画を提案し確認を行った。

ウ 考察

(ア) 支援シートの活用について

- ・ ケース検討会では、「みんなが学びやすい授業チェックシート」と「学びの連携シート」を活用することで、課題を整理しやすくなり、効率的に手立てを考えることができた。また支援の継続性や連続性につなげることができた。
- ・ 研究授業等では、「みんなが学びやすい授業チェックシート」と「授業展開の中での個に応じた活動シート」を活用することで、学習を理解しづらい生徒に対しての手立てと評

価値がわかりやすく、授業を見る視点をはっきりさせることができ、協議を深めることにも役立った。

- ・ 校内研修会等の中で、「特別支援教育等記録シート」や「学びの連携シート」を活用することにより、校内委員会の活動や授業改善の取組を全教職員に周知徹底するのに有効であった。また、「みんなが学びやすい授業チェックシート」を活用することは、特別支援教育の基本的な視点を共有し、個々の授業改善の具体的な手立てを考え、全教職員で共通認識を図ることに有効であった。

(イ) 校内支援体制の整備について

年度当初の会では、生徒の実態に関する情報交換が中心となり、支援策を検討する時間が少なく具体的な手立てまで検討することが難しかった。しかし、課題を絞り、時間設定をして運営を行ったり、課題に合わせ少人数のケース検討会を行ったり、支援ツールを活用したりすることで、具体的な支援策を考えることができ、効率的な運営ができるようになった。

そして、来年度の校内委員会は、月1回開催を基本的とし、課題に合わせてケース検討会も随時開催することを確認することができた。このように少しずつではあるが、着実に校内支援体制の整備を進めることができた。

エ A 中学校の成果

特別支援教育に関する「校内の意識及び行動アセスメント」(図4)を、支援前と支援後で比較すると、支援後は全体的にプロットが右上に移動し、まとまってきている。この結果から、今回のコンサルテーションを通して、気づきやニーズが高まり、コミュニケーションを取りながらチームで解決を図ろうという傾向は高くなってきていることが分かる。

そして、個人ではなく組織で考え、解決しようとする意識の向上が見られた。また、ケース検討会では、特別支援教育の視点に配慮した具体的な手立てを短時間で考えられるようになってきた。これらのことから、校内委員会等の既存の組織の中での情報交換力を向上させることで、校内支援体制の整備につなげることができたのではないかと考える。

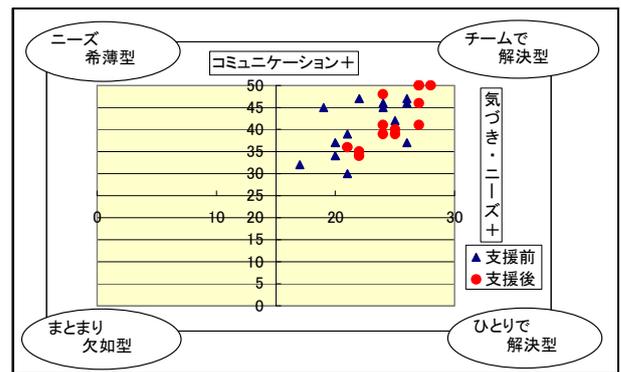


図4 国立特別支援教育総合研究所  
特別支援教育に関する  
「校内の意識及び行動アセスメント」

(2) B 小学校での学校コンサルテーション

B 小学校は、教員数 11 名、児童数 66 名、学級数 7 学級という小規模の学校である。

ア コンサルテーションの概要

(ア) コンサルティの主訴

校内支援体制は整っているが、更なる充実を図りたい状況である。そこで、特別な支援を必要としている児童の認知特性に応じた手立ての実践を行い、その成果を学校全体で深めたいということがあげられた。

(イ) 学校のアセスメント

「校内支援体制チェックリストの結果」(図5)を見ると、校内支援体制の整備はある程度進んでいるが、保護者との連携が弱いことがうかがえる。

特別支援教育に関する「校内の意識及び行動アセスメント」(図6)からは、学校全体としては、チームで解決していこうと考えている教職員が多い。しかし、コミュニケーション力に格差が見られ、アンケート項目からは、特別支援教育に関して、理想的には理解しているものの、現実の場面では難しさを感じている教員が多くいることが推測される。

これらのことから、教職員全体の特別支援教育に関する実践力を高めていくことが必要であると考え、学校コンサルテーションを進めるにあたり、より具体的な指導方法や教材を小集団で協議をするような研修を取り組んでいくこととした。

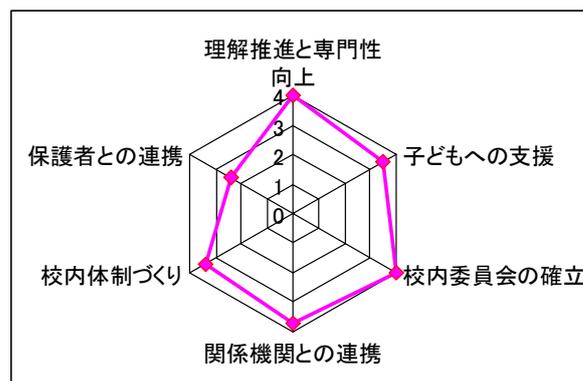


図5 「校内支援体制チェックリスト」の結果

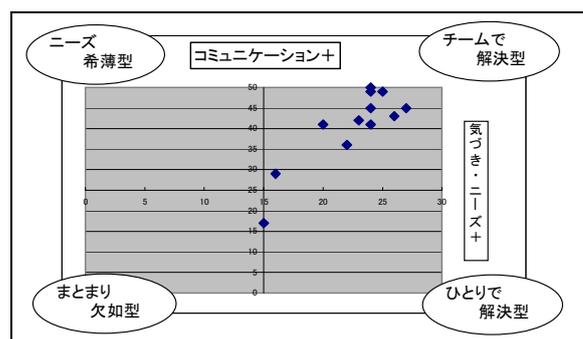


図6 国立特別支援教育総合研究所  
特別支援教育に関する  
「校内の意識及び行動アセスメント」

イ 取組内容

(ア) 校内研修会の実施：4月5日（月）

これまでに研修してきた発達障害等の基礎知識をもとに、「子どもが明日も来なくなる学級づくり」と題して、特別支援教育の視点に配慮した、学級づくりや授業での具体的な手立てについて、学校全体で研修を行い、授業改善の取組の基礎とした。

(イ) 校内委員会への参加：5月14日（金）

授業改善を進めるにあたり、対象の児童や学級について検討を行い、2年の国語科の授業において、授業に集中できず、漢字を覚えるのが苦手な児童の漢字指導に焦点をあてることとした。その中で、特別支援教育の視点に配慮した授業づくりと、子どもの認知特性に応じた手立てについて協同で研究し、研究授業を通して学校全体で子どもへの支援方法を共有し、個々の授業実践につなげられるようにコンサルテーションを行うこととした。

学校コンサルテーションを進めるうえで、学校の特別支援教育に関する取組（校内委員会等の取組の経過）が一目で分かる記録として「特別支援教育記録シート」と、個別の指導計画の中の課題と授業をより密接につなげることのできるシート「学びの連携シート」を作成することとした。

(ウ) 校内委員会・ケース検討会への参加：9月22日（水）

ケース検討会においては、子どもの認知特性を踏まえた授業の進め方や教材・教具の工夫等、具体的な手立てについて検討を行った。授業観察や担任の資料から、対象児童の認知特性としては、同時処理を活用した指導が有効であると考えた。そこで、LD児の漢字学習の支援を行うためにCD教材の活用について提案し、今後の授業で取り入れることとした。また、特別支援教育の視点から、教室環境の整備などの改善も行うことを確認した。

(エ) ケース検討会への参加：10月20日（水）

前回のケース検討会を受けて、今回の授業では、次の点が改善された。

- ・ 授業の最初に、前日の新出漢字の小テストを実施した。
- ・ 漢字のワークブックを進める際に、筆順指導の声のスピードに注意し、また、声に合わせて書いているか確認作業を行った。練習の一部は、声なしで自分の力で書く練習をさせるようにした。
- ・ 漢字の成り立ちについては、子どもに読ませた後、説明も付け加えるようにした。
- ・ 授業の後半は漢字の習得を強化していくことをねらい、漢字の形を正確に覚えるように、間違い探しを行う漢字プリント（正しい漢字と一部が間違っているもの）を活用した。
- ・ LD児の漢字学習の支援を行うためのCD教材を参考にして、漢字の足し算のプリントを作成し活用した。

このような工夫や手立てを行った結果、対象児童の手遊びが少なくなり、少し授業に集中できはじめていることが見られた。

今後の授業改善のポイントとして、授業の導入時に「意味から覚える漢字の絵カード」の活用を行うこと、漢字をいくつかの要素に分け、重ねると一つの漢字になる「漢字の合成カード」の活用を入れていくこと等を確認した。また、時間の構造化（授業の流れなどを分かりやすく視覚化する）を図るために、授業の流れを黒板に提示することも確認した。

今回「学びの連携シート」を活用することで、改善点をより明確にすることができた。学習指導案の「授業展開の中での個に応じた活動シート」を活用し、研究授業の学習指導案の作成を協同で行っていくことと、コーディネーターには、校内委員会やケース検討会、校内研修会等の特別支援教育に関する取組全般の記録として、「特別支援教育等記録シート」の活用を依頼した。

(オ) ケース検討会への参加：11月10日（水）

前回のケース検討会を受けて、今回の授業では、次の点が改善された。

- ・ 時間の構造化として、学習の流れを黒板に提示することができた。（写真1）
- ・ 視覚的な教材・教具を活用することに関しては、意味から覚える漢字の絵カードとOHCを活用することができた。
- ・ 児童の認知処理に応じた教材を活用することに関しては、漢字の合成カードを作成し活用した。3段階のレベルのカードを用意し、それぞれのコースに、子どもたちが好きなキャラクターの名前を用いて、自分でレベルを選択させながら活用できる工夫をおこなった。また、整理整頓が苦手な点を考慮して、個人ボックスを用意し、準備や後片付けを短時間でできるような工夫をした。（写真2）

これらの支援の結果として、対象児童は手遊びも減り、しっかり前を向いて説明を聞くことができ、授業に集中している姿が見られた。また、自ら発言したり、指示されるまでに考えて行動したりすることができていた。また、漢字の合成カードでは、自分が選択したレベルから取り組んだ後、難易度の高いレベルのカードに自ら取り組むなど、学習に対し積極的な活動も見られた。

ケース検討会では、「学びの連携シート」と、担任が作成してきた次回の研究授業の学習指導案（「授業展開の中での個に応じた活動シート」）をもとに、授業展開について協同で検討し、



写真1



写真2

次のような改善を加えることとした。

- ・ 漢字指導の目標と評価規準を記入する。
- ・ 漢字のでき方の説明は漢字の絵カードの後に行い、より印象を強める。
- ・ 複合動詞については動作化や視覚化しやすい言葉を抽出する。
- ・ 視覚化においては、教科書以外の絵や写真を準備して活用する。

(カ) 校内研修会（研究授業）・校内委員会への参加：12月8日（水）

研究授業では、授業を評価する視点として「みんなが学びやすい授業チェックシート」と、「授業展開の中での個に応じた活動シート」を活用した。また、授業展開の中で行った手立てのポイントは次の4点であった。（写真3）

- ・ 時間の構造化（授業の流れを分かりやすく視覚化する）等を図り、児童が1時間の学習の見通しをもてるように流れを黒板に提示する。
- ・ 意味から覚える漢字の絵カードを、OHCを使用して拡大する等、視覚的な教材・教具を活用する。
- ・ 児童の認知処理に応じた教材として、漢字の合成カードを作成し活用する。その際、レベルを変えた合成カードを準備し、児童に選択させながら課題を行う工夫を取り入れる。
- ・ 言葉の意味を具体的にイメージできるように動作化したり、絵カードを提示し視覚化したりする。



写真3

研究協議では、授業者からこれらの支援方法について説明した後、「みんなが学びやすい授業チェックシート」の項目を参考に話し合いを行った。そして、「授業後の整理シート」（別添資料5参照）を活用し、授業について「良かった点」「改善点」をグループで整理して発表を行い、通常の授業の中で、特別教育の視点を取り入れていく重要性や有効性を全教職員で確認した。

ウ 考察

(ア) 授業改善について

年度当初の校内委員会を経て、ケース検討会を重ねながら対象児童の認知特性を活かした手立てについて検討した。そして、改善点として以下の3点の手立てを重点的に行った。

- ・ 時間の構造化を図り、見通しがもてるように学習の流れを黒板に提示する。
- ・ 理解しやすい視覚的な教材・教具として、「意味から覚える漢字の絵カード」とOHCを活用する。
- ・ 得意と思われる同時処理系の学習として、「漢字の合成カード」を活用する。工夫として、レベルの違ったカードを用意し、自己選択させる。

授業改善に対する評価として、漢字指導時間における対象児童の不適切行動の変容を見た。「対象児童の不適切行動について」（図7）の中のグラフを見てみると、全体的には不適切行動は減少傾向にあり、授業に集中できてきていることが分かる。また、不適切行動以外の変化としては次の点が見られた。

- ・ 漢字の絵カードに注目し、何の漢字か想像し、積極的に発表しようとするが多かった。
- ・ 筆順を覚えるときに、先生の声かけに合わせて書けるようになってきた。
- ・ 漢字の形取りが上手になってきた。

新出漢字の定着については、小テストからは大きな変化は見られなかった。今後は、このような取組を継続し経過を見ながら、状況により認知特性を考慮した家庭学習用のプリントの活用や個別学習を行うことを検討する必要があると考える。

また、「研究授業後の子どもたちの感想」(表2)からも分かるように、重点的に行ってきた手立ては、全体的に興味・関心を引くことができ、積極的に取り組んだ様子もうかがえる。

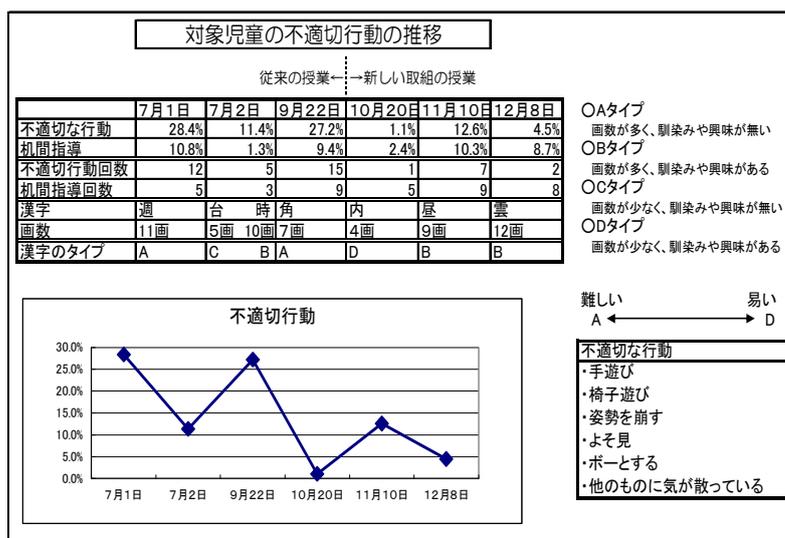


図7 対象児童の不適切行動について

表2 研究授業後の子どもたちの感想

	感想
A	・OHCで漢字をするのと、ピチュー・ピカチュー・ライチューで国語をやるのがおもしろかった。 ・絵カードを、当てるのがクイズみたいでおもしろかった。
B	・ぼくは、OHCで勉強するのが楽しかったです。黒板に映って当てるのが面白かったです。今日はどんな漢字かなと、当てるので楽しかった。 ・言葉の足し算の絵が上手でした。
C	・ぼくは、ジャンケンゲームをしたことが楽しかったです。ジャンケンをして、ジャンプしながら進むところが面白いです。
D	・私は、ピチュー・ピカチュー・ライチュー、コースカードが面白かった。その訳は、合わせるのが面白かったです。合わせていく時に、「ちゃんとできるかな」と考えながらするのが面白かった。
E	・私は、OHCを使って勉強したとき、すごく楽しかったです。OHCを使ってみると、問題みたいに、漢字の絵が出てくるのが楽しかったです。 ・漢字を重ねて、漢字を作るのが楽しかったです。 ・ピチュー・ピカチュー・ライチューのコースカードの絵はきれいでした。
F	・私は、漢字の勉強で絵カードが楽しかったです。絵カードの楽しかったところは、クイズ問題みたいなところですよ。 ・言葉の足し算で、動いたところが楽しかったです。 ・漢字の勉強のピチュー・ピカチュー・ライチューコースを初めてやった時、パズルみたいで楽しかったです。
G	・私は、OHCとピチューとピカチューとライチューをするとき楽しかったし、すごく分かりやすかった。 ・OHCを初めて使うとき、OHCをみてびっくりした。何をするかと思ったら、漢字のカードを出して映していたからびっくりした。 ・ピチューとピカチューとライチューを使うとき、分かりやすくて楽しかった。 ・ノートだけでするより分かりやすい。

(イ) 支援シートの活用について

- ・ ケース検討会の中で、「学びの連携シート」を活用することで、前回の検討内容の確認や支援内容の評価、課題の整理ができた。
- ・ 研究授業等では、「みんなが学びやすい授業チェックシート」と「授業展開の中での個に応じた活動シート」を活用することで、特別支援教育の基本的な視点や支援児童への支援方法と評価が明確になり、教員の中で授業を見る視点の共有化を図ることができ、研究協議を深めることができた。
- ・ 研究授業後の研究協議では、「みんなが学びやすい授業チェックシート」と「授業後の整理シート」(表3)を活用することで、論点が整理され、効率的に話し合いを進めることができた。また、研究協議の中で効果的な手立てとして挙げられた内容と、「みんなが学びやす

い授業チェックシート」の項目を参考にし、自分の授業改善に向けて具体的な手立てを考  
えることができた。

(ウ) 校内支援体制の充実について

ケース検討会では、個へ焦点を当てた手立てや、特別支援教育の視点を取り入れた学級全体  
への手立てについて、試行錯誤を重ねながら検討し、具体的な手立てを協同で考えることが  
できた。また、研究授業後の校内研修会で討議された、良かった点と改善点は以下の「授業後の  
整理シート」(表3)のとおりで、重点的に行った手立てについて良い評価を得ている。また、  
改善点については、教材・教具についての改善点や新たな工夫についての提案があり前向きな  
意見が多く見られた。

また、「みんなが学びやすい授業チェックシート」を参考にし、各自で授業改善に向けての  
具体的な手立てや取組を考えましたが、支援方法に対して多くの気づきが見られ、自分自身の授業  
改善に向けての意欲も感じられた。今後は、認知特性についての研修を深め、それぞれのケー  
スに対応しながら、校内委員会やケース検討会で具体的な手立てに関して更に検討にしていく  
必要がある。

このように、ケース検討会や研究授業を含めた校内研修会の中で特別支援教育の視点や子ど  
もの認知特性に応じた授業づくりについて、学校全体で協議し深めることで、教員の意識も向  
上し、各自の授業改善につなげることができたと考える。

表3 授業後の整理シート

	良い点	改善点(代案)
① 目標 ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>対象児が学習に参加し発表できていた。</li> <li>本時の目当(ねらい)をはっきりさせることができていた。</li> <li>学習の構造化ができていて、色々な場面で指示がなくても、子どもたち自身で次の行動ができていた。</li> </ul>	
② 学習 形態・ ルール	<ul style="list-style-type: none"> <li>全員の児童が学習の流れを理解して、自分で考えて行動や発表ができていた。</li> <li>身体全体を使っての筆順指導。</li> <li>言葉と動作を結びつけた学習。</li> <li>課題が早く済んだ子どもが自主的に本読みを行うなど、子どもの能力差を考慮したルールができていた。</li> <li>学習規律がしっかりできていて、落ち着いて学習しようという雰囲気になっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>もう少し子ども同士の関わりを入れても良かった。</li> <li>発言がつぶやきになっていることがあるが、他の学習ルールはできているので、指導すれば定着するの早いのではないか。</li> </ul>
③ 授業 の構 成	<ul style="list-style-type: none"> <li>動と静の組み合わせがあり、子どもが飽きない授業展開。</li> <li>動作化をして、言葉のイメージがしやすいように工夫できていた。また、子どもたちが、動作化を楽しんでいた。</li> <li>子どもたちが作った落ち葉の活用。</li> <li>早く終わった子どもへの手立て(プリント等)ができていた。</li> <li>一斉と個別の学習形態が明確になっていた。(変化があつて飽きない)</li> <li>色々な感覚を使用させることが出来ていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉の合成では、変化型と省略形を分けて指導する。</li> <li>友だちと話し合う場面を取り入れても良かった。</li> <li>言葉の足し算なので、まずは二つをくっつけるということをさせたい。</li> <li>先に複合動詞のルールを見つけてくれた子どもがいたが、先にルールを見つけて(教える)プランの方が良かったかもしれない。</li> <li>複合動詞のワークシートの問題は、文法上いくつものパターンが見られ、分りにくかったので、「ひろいあつめる」と同じパターンのものでやらせるほうが良い。</li> </ul>
④ 出し 方の	<ul style="list-style-type: none"> <li>短い言葉で、はっきり、ゆっくり、丁寧な指示ができていた。</li> <li>筆順指導での、「1、横 2、斜め…」などのお唱えパターン化できていて、速度も適切であった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字の合成カードで、早く終わった子どもに対する指示が必要だった。</li> <li>丁寧な指示であったと思うが、発達段階としていつまでを想定していますか？</li> </ul>
⑤ 板書 の工 夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵を提示しての説明は、わかり易かった。</li> <li>挿絵やイラストが多用され、子どもたちが動作をイメージし易かった。</li> <li>本時の学習内容を分かりやすく書く場所があつて良かった。今何をやっているかが分かり安心できる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉の絵カードは、絵の細かいところに注目しすぎた子どもがいた。</li> <li>授業後に一時間分の内容が分かるような、板書計画が必要ではないか。</li> <li>書く分量や速度を高めていく必要のある子どももいるが、その兼ね合いはどうすればよいか。</li> </ul>
⑥ ノ イ 指 導 ト	<ul style="list-style-type: none"> <li>筆順指導を行う際、色鉛筆で筆順を意識させる工夫が見られた。</li> <li>ノートでの筆順確認が丁寧にできている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>熟語作りをした後の意味の説明をもう少し丁寧にしてもいいのではないか。(入道雲やひこうき雲など分りにくい場合は写真や絵を提示してあげても良い)</li> </ul>
⑦ 教材 ・教 具	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもたちが楽しいと思える事(合成カードや落ち葉拾いなど)などが取り入れられていた。</li> <li>空書きをする際の、マス入りの大きな紙の利用が有効だった。</li> <li>OHCを活用し教材に興味を持たせる工夫があつた。</li> <li>合成カードの指導は、意欲的な活動につながる面白い工夫だと思つた。</li> <li>教材・教具の工夫でうまく興味付けができていて、楽しい授業になっていた。</li> <li>視覚教材(言葉の足し算の絵や漢字の絵カードなど)がよく工夫されていて、子どもたちの関心や意欲を高めていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後の活用を考え、絵をラミネートしていたが、場所によっては光って見づらかった。</li> <li>合成カードの向きが分りづらかった。</li> <li>合成カードの形や色を工夫すると良いのではないか。</li> <li>合成カードは3つのレベルがあり、難しいレベルを選んで悩み、時間がかかっている子どもがいた。</li> <li>合成カードをグループ対抗で、ゲーム的に取り組む方法も面白いかもしれない。</li> <li>合成カードは良いが、準備が大変ではないか。</li> </ul>

## エ B小学校の成果

「校内の意識及び行動アセスメント結果」（図8）を支援前と支援後で比較すると、支援前に比べてプロットが全体的に右上にシフトしてチームで解決型の傾向がより強くなってきていることが分かる。これは、特別支援教育に関する校内の意識が高まることで、特別な支援を必要としている児童に対しての気づきが大きくなるとともに、課題に対して個人で解決するのではなく、チーム等の集団で取り組もうとする傾向がより高まってきたことを表していると考ええる。

授業改善の実践を通しては、特別支援教育の視点や子どもの認知特性に応じた支援方法を共有することで、個々の授業改善につなげることができた。また、この取組を通して、どういった体制でどのように取組を進めればよいかを、学校として確認できたと考える。

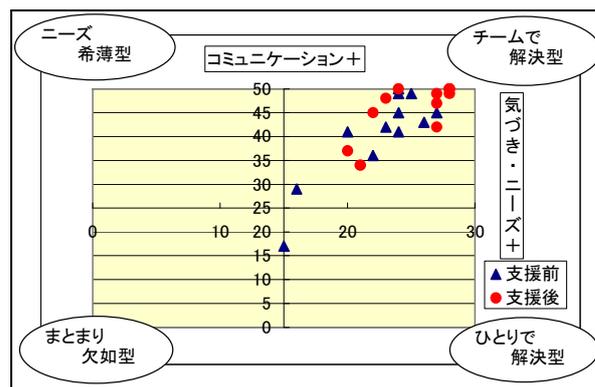


図8 国立特別支援教育総合研究所  
特別支援教育に関する  
「校内の意識及び行動アセスメント」

授業改善の実践を通しては、特別支援教育の視点や子どもの認知特性に応じた支援方法を共有することで、個々の授業改善につなげることができた。また、この取組を通して、どういった体制でどのように取組を進めればよいかを、学校として確認できたと考える。

## 5 本研究の成果

組織に働きかける学校コンサルテーションを行うことで、次の成果を得ることができた。

- ・ 特別支援教育の視点に配慮し、子どもの認知特性に応じた授業づくりを進めることができ、また、その支援方法について学校全体で共有することができた。
- ・ 個人ではなくチーム（組織）での課題解決力を向上させることができた。
- ・ 各組織の会の運営を効率的で効果的に進めることができた。
- ・ 校内委員会の役割を明確化し、定期的な開催につなげながら年間活動計画を作成することができた。
- ・ コーディネーターが、これからどのように組織を運営すればよいか、自分の役割はどうあるべきかなど、多くの気づきがあり、役割の明確化や意識の向上につなげることもできた。

このように、各種の支援ツールを活用しながら、学校組織に働きかける学校コンサルテーションを進めることにより、校内委員会を効果的に運営し、一人の教員が個人として解決していくのではなく、学校全体の課題として捉え、チームで解決しようという意識が向上してきた。そして、特別な支援を必要とする子どもに対しての支援方法を、全教職員で共有を行い、特別支援教育の視点を取り入れた授業の実践力の向上にもつなげることができた。

## 6 本研究の課題

今回の研究で作成・活用された支援ツールについては、今後の実践の中でより使いやすい形に改善していくことが必要である。また、活用方法に関しては、できるだけ学校コンサルテーションを行っている場でシートを作成するなど、時間を有効に使った効果的な活用の仕方を工夫する必要がある。

特別支援学校においては、小・中学校等に対する支援をより充実させるため、まず、今までの学校支援の状況を整理したうえで、それぞれの教員が持っている個々の情報を共有化し、活用することができる自校内のシステムを充実させることが課題である。

本研究での学校コンサルテーションを活用した学校支援の実践を重ね、その効果を検証しながら、地域における特別支援教育のセンターとしての機能の充実を図ることが大切であると考えられる。

#### 【引用参考文献】

- ・高知県教育センター『特別支援教育学校コーディネーターサポートブック』2009
- ・文部科学省初等中等教育局長『特別支援教育の推進について（通知）』2007
- ・山田充『意味から覚える漢字イラストカード』かもがわ出版、2009
- ・植木田潤、小林倫代、笹森洋樹『学校コンサルテーションに関わる「校内の意識及び行動アセスメント（試案）」の作成』国立特別支援教育総合研究所、教育相談年報、第30号、2009
- ・国立特別支援教育総合研究所『学校コンサルテーションを進めるためのガイドブックーコンサルタント必携ー』ジヤース教育新社、2007
- ・国立特別支援教育総合研究所『小・中学校等における発達障害のある子どもへの教科教育等の支援に関する研究』2009
- ・小池敏英、雲井末歆、渡邊健治、上野一彦『LD児の漢字学習とその支援 一人ひとりの力をのばす書字教材』北大路書房、2002
- ・月森久江『教室でできる特別支援教育のアイデア 172 小学校編』図書文化、2009
- ・東京都 日野市 公立小中学校全教師・教育委員会 with 小貫悟『通常学級での特別支援教育のスタンダード』東京書籍、2010

別添資料1

平成 年 月 日 ( ) 時 分 ~ 時 分					
学びの連携シート	対象児童生徒 ( ) 年 ( ) 組 氏名 ( )	記録者 氏名 ( )	コンサルタント 氏名 ( )		
1 課題 (個別の指導計画より抜粋)	2 支援方法	3 支援内容		4 評価内容	評価
		指導の場	指導内容		
		数学			5 改善点
		国語			
		社会			
		英語			
		理科			
		その他			

※評価  
(A:とても効果があった、B:少し効果があった、C:効果がなかった、D:実施できなかった)

※3:よくできている、2:できている、1:あまりできていない

	基本的な視点	チェック
① ねらい・目標	個別の指導計画をもとに、子どもの特性に応じた学習の目標やねらいが設定されている。	□3 □2 □1
	子どもに学習の目標やねらいをわかりやすく示している。	□3 □2 □1
② 学習形態・ルール	一斉学習だけでなく、習熟度や学習のねらいなど、目的を明確にして学習形態を工夫している。	□3 □2 □1
	グループ学習など、友だち同士教えあう場を設定している。	□3 □2 □1
	子どもの状況や学習内容を考慮し、複数の教師で指導を行う場合は、教師間の連携が十分にとれている。	□3 □2 □1
	話の聞き方、発言の仕方など、話し方のルールができている。	□3 □2 □1
③ 授業の構成	学習の流れをはじめに示し、見通しをもって活動できるようにしている。	□3 □2 □1
	授業の中で、いろいろな感覚を使わせる工夫をしている。	□3 □2 □1
	「静」と「動」の活動を組み合わせるなど、学習に変化をもたせている。	□3 □2 □1
	難易度が違う活動内容や課題を用意し、子どもが選択できるようにしたり、課題が早く終わった子どもには次の課題を提示したりしている。	□3 □2 □1
④ 出指示方の	適切な声量で、指示は短く、一つの話で一つの内容を明確に伝えるようにしている。	□3 □2 □1
	活動の途中で指示を出すときは、活動を止めてから話すようにしている。	□3 □2 □1
⑤ 板書の工夫	板書の文字の大きさや量を考え、写すことが負担にならないように配慮している。	□3 □2 □1
	授業の流れがわかる板書にしている。	□3 □2 □1
	視覚的に絵カードやチョークの色、マーク等で大切なところを強調する等、板書の工夫をしている。	□3 □2 □1
⑥ ノート指導	ノートをとるタイミングを示し、時間を十分に設定している。	□3 □2 □1
	何をどのように書くか具体的に指示し、見やすいノートになるよう指導している。	□3 □2 □1
	子どもの実態に合わせて、ワークシートを活用するなどの配慮をしている。	□3 □2 □1
⑦ 教材・教具	視聴覚機器を積極的に活用している。	□3 □2 □1
	子どもの実態に合わせて教材・教具を工夫している。	□3 □2 □1
⑧ 学習の評価	授業中、積極的に子どもの良いところを見つけてほめている。	□3 □2 □1
	子どもの発言は、正解でなくても大切にしている。	□3 □2 □1
	机間指導をていねいに行い、一人一人に助言したり認めたりしている。	□3 □2 □1
	子どもに分かりやすい具体的な評価をしている。	□3 □2 □1
⑨ 学習環境	教室を整理整頓し、余分な視覚・聴覚刺激等を取り除き、学習に集中できるようにしている。	□3 □2 □1
	持ち物や学習教材の置き場所を分かりやすくしている。	□3 □2 □1
⑩ 教師の姿勢	子どもの話にじっくり耳を傾け、話しやすい雰囲気を作っている。	□3 □2 □1
	きれいな言葉遣いや肯定的な表現をするよう心がけている。	□3 □2 □1
	自尊心を傷つけるような叱り方はしないようにしている。	□3 □2 □1
	不適切な行動に対しては、注意だけでなく適切な行動を示している。	□3 □2 □1

### 別添資料3

#### ☆ 自分の授業改善に向けて

(みんなが学びやすい授業チェックシートの項目を参照)

(1) 今日の授業を参考にし、自分の授業で改善してみよう、取り入れてみようと思うことについて、どのような場面で、どのような手立てを取り入れるかを、下記の項目の分類を参考にして、具体的にお書き下さい。(複数選択可)

- ①目標・ねらい ②学習形態・ルール ③授業の構成 ④指示の出し方 ⑤板書の工夫 ⑥ノート指導  
⑦教材・教具 ⑧学習の評価 ⑨学習環境 ⑩教師の姿勢 ⑪その他

学年		指導場面 (教科等)		生徒氏名	
生徒の実態					
番号	具体的な手立てや取組				
学年		指導場面 (教科等)		生徒氏名	
生徒の実態					
番号	具体的な手立てや取組				
(2) 現在、授業や学級運営において困っていることがあればお書き下さい。					

## 別添資料4

### ☆ 自分の授業改善に向けて (みんなが学びやすい授業チェックシートの項目を参照)

(1) 今日の授業を参考にし、自分の授業で改善してみよう、取り入れてみようと思うことについて、どのような場面で、どのような手立てを取り入れるかを、下記の項目の分類を参考にして、具体的にお書き下さい。  
(複数選択可)

- ①目標・ねらい ②学習形態・ルール ③授業の構成 ④指示の出し方 ⑤板書の工夫 ⑥ノート指導  
⑦教材・教具 ⑧学習の評価 ⑨学習環境 ⑩教師の姿勢 ⑪その他

番号	どのような場面か、また具体的な手立てや取組

(2) 現在、授業や学級運営において困っていることがあればお書き下さい。

--

別添資料5

授業後の整理シート

	良い点	改善点(代案)
① 目標 ・ねらい		
② 学習形態 ・ルール		
③ 授業の構成		
④ 指示の 出し方		
⑤ 板書の工夫		
	良い点	改善点(代案)
⑥ ノート指導		
⑦ 教材・教具		
⑧ 学習の評価		
⑨ 学習環境		
⑩ 教師の姿勢		
⑪ その他		

# 別添資料6

## 特別支援教育記録シート

日時	校内委員会・研修会等	協議・研修内容	講師等氏名及び参加者	協議・研修の記録	今後の課題やその後の取組
4月					
5月					
6月					
7月					
8月					
9月					
10月					
11月					
12月					
1月					
2月					
3月					

# 別添資料7

平成 年度 校内委員会等の年間活動計画（案） ☆支援会議は、各月の第（ ）週の（ ）曜日の放課後の開催を基本とする。

取組の概要				
月	校内委員会	校内研修会等	コーディネーター	活用シート類等
4月				
5月				
6月				
7月				
8月				
9月				
10月				
11月				
12月				
1月				
2月				
3月				